

終える命

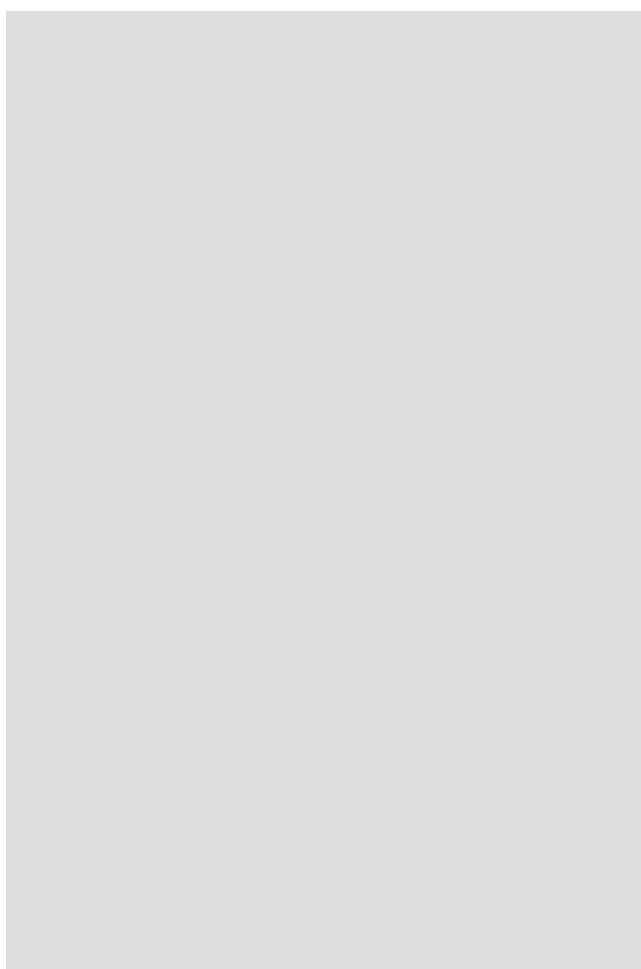
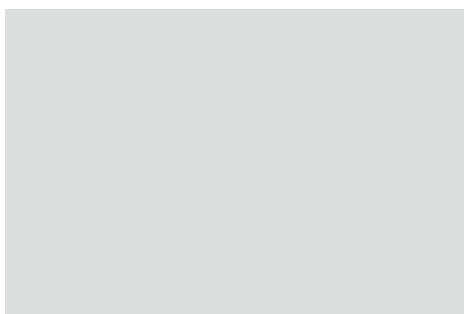
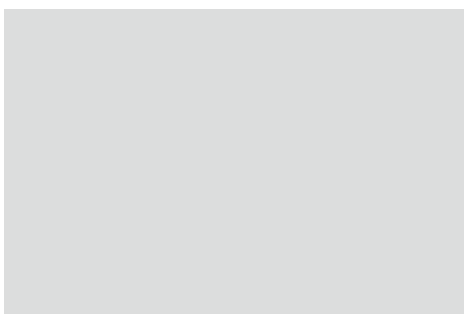
つなぐいのち

國森
康弘

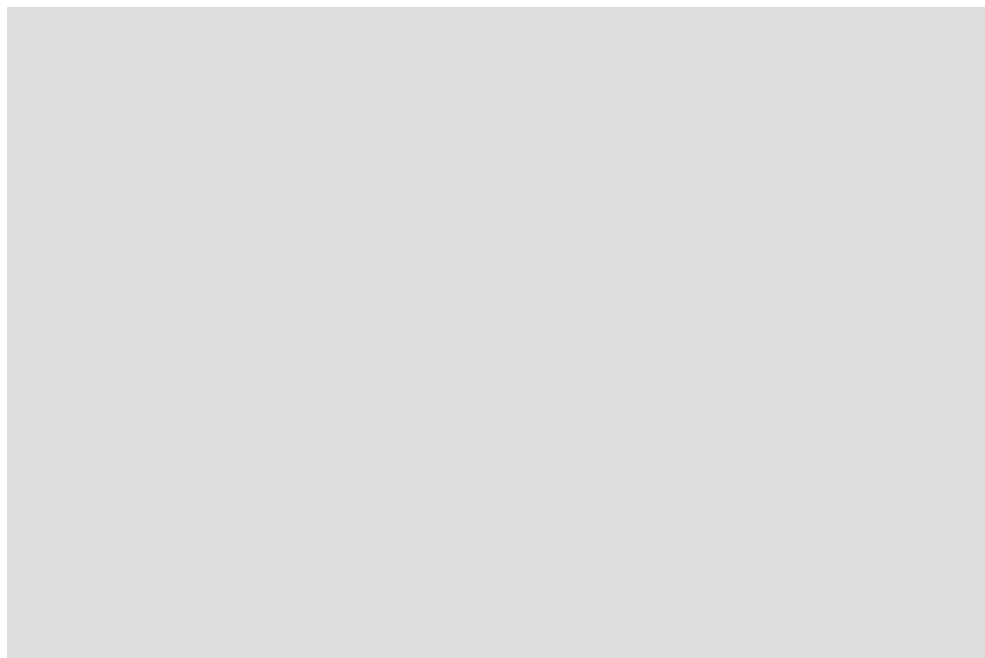
第
16
回
彼が遺したかったもの

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

2016年夏、母は勝彦君の墓のそばの自宅に戻ってくる。



訪問看護師の志賀さんの顔を見ると、ほっとした。



子どもとキャッチボールする
夢はあきらめた。
ただ……。

福

島県南相馬市内、4畳半2間の仮設住宅に勝彦君はいた。すでに、体のあちこちにがんが転移している。「若いぶん……、駆け抜けるように数週間で逝ってしまうかもしれない」と、医師は表情を曇らせた。

勝彦君は28歳だった。左足の痛みに耐えられなくなったのが6、7年前。骨肉腫というがんの一種と告げられた。体に10数回メスを入れ、髪は一時期すべて抜け落ちた。病気を抱えながら、懸命に働いた。東日本大震災の発生時は職場に向かう途中だった。原発事故による放射能汚染のために、実家には戻れない。群馬や福島の内陸部での避難生活と通院を余儀なくされ、ようやく今の仮設住宅に落ち着いた。

結婚をして、できれば子どもを2人授かって、キャッチボールするのが夢だった。将来の夢のために、酒もたばこもギャンブルも控え、こつこつと貯金してきた。「唯一のぜいたく」は、新車で旅をすることだ。けれども、愛車は4000キロの通算距離で、ぱったり止まる。勝彦君は、残された時間が長くないことを自覚していた。仮設の薄暗い部屋で、カメラに収めた旅行先での写真をじっと、見つめる。訪問看護師の志賀さんが来ると、その表情がふっと、和らいだ。

「キャッチボールの夢はあきらめた」。勝彦君は、そう言った。「ただ、やっておきたいことがある」と。あとに残る母のために、2人の笑顔の写真を撮ってみたい——と願った。筆者は、最後の何日間か、少しずつ息子と母の写真を撮りためていく。そして、本当に駆け抜けるようにして、彼は旅立った。「よく病氣と闘ってきたねえ。ゆっくり休んでね……」と慈しむ母や祖母に見守られながら。勝彦君は、亡くなる前に母に一枚の手紙を残していた。

〈私は長くは生きられそうにありません。親より先に死ぬのは一番の親不孝だと考えていましたが、本当に親不孝になってしまいそうです。最後の償いになるかどうか分かりませんが、少しでも貯金を残します。これは母のために使ってください。〉

私なりに充実した人生だったと思います。最後に母さん、ごめんね。今度もし一度生まれくる事があったら、母さんの子どもで生まれてくる。俺の分まで長生きして下さい。希望としてお墓は新しく作って下さい。デザイン墓が希望です〉

「夢」と「希」と刻んだデザイン墓。勝彦君自身が、生前に発注してあらかじめ建てておいた。〈撮影は2012〜13年〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。